

積丹いろいろ

積丹の

山・川・海でつながるいのちの輪(その2)

生物多様性とは

突然ですが、「生物多様性」という言葉を知っていますか？
国連環境計画が準備して、地球

の生物の多様性を保全し、生物資源の持続的利用を図り（絶滅させることなく上手に利用していく考え方）、それぞれの国が責任を持って生物多様性を保全していくことが、1992年にブラジルで開かれた国連の地球サミットで条約として成立しました。わが国も1993年に条約に同意し、生物多様性に関する法律（生物多様性国家戦略）を1995年に策定したところです。



▲余別川中流域の淵

まず、景観レベルの生物多様性があげられます。

生物多様性には3つのカテゴリー（段階）があると言われています。

まず、景観レベルの生物多様性があげられます。

今月の担当は...



地域おこし協力隊
環境生態系保全技術指導員
河村 博

これは、森林や砂漠、山岳といった広い範囲にわたるもので、その中で暮らす異なる生き物たちの集合（生態系）が含まれます。

次のレベルが種の生物多様性です。

オオワシやヒゲマ、サクラマスや水生昆虫のカワゲラやカゲロウ、カタクリやニリンソウなど、さまざまな種類の生き物のグループがこれに当たります。

最後のレベルは、遺伝子レベルの生物多様性です。

同じ種のサクラマスでも、地域や川の支流によつて遺伝的な違いが見つかります。

たとえば、サクラマスが川から海に下る時期は、地域により異なり、道央・道南では4〜5月、一方、道北や道東では5〜6月です。この行動の違いは

遺伝的な違いによるものなので

このように「生物多様性」とは、見ると、見る立場によりそのレベルは変わるといっていいです。

ところで、普段わたしたちが「この地域は生物多様性がよく維持されている。」と言う場合、「この地域にはたくさん種類の生き物が棲んでいる。」と考

生物多様性の意味

「生物多様性が維持される、あるいは生物多様性が保全される」ことの、本当の意味は、たんにそこに棲んでいる生き物の種類がたくさんいれば良いことでは決してありません。生物多様性が維持されることは、た

たとえば、ある川に砂防ダムや頭首工（農業用水をひくための堰）が造られたとします。この川は昔からサケやマスなどが遡上する川として知られていました。ダムや頭首工に魚道がなくとも、川の上流には河川残留型のアメマスが棲み、砂防ダム

がある支流にも河川残留型のアメマスが残っています。ダムの下流にはサケが上ってきます。サクラマスも数が減りつつそれでもまだ川にもどつてきます。種の数だけ数えると昔と変わって、この川は生物多様性が維持されていると言えないことは明らかです。

つまり、川の下流から上流、さらに本流と支流のつながりが絶たれているからです。川で育つ稚魚や幼魚がやがて海に下り、大きく成長してふたたび川にもどり自由に場所や相手を選んで産卵できることが、先に述べた3つのカテゴリーすべてを満足する生物多様性を維持していることになるのです。

余別川と生物多様性

さて、サクラマスサンクチュアリセンターがある余別川は、本流や支流にダムや堰堤が全くない貴重な川であることを知っていますか？

余別川は、またサクラマスやシロサケの自然産卵を促す保護水面でもあり、現在もなお山・川・海のつながりが保たれた、

生物多様性が真の意味で維持された貴重な川なのです。

ここでは、太陽のエネルギーを利用する植物たちの光合成により山の栄養が産み出され、その一部が余別川を通じて海へもたらされます。海の沿岸域では、川の栄養と海の栄養からやはり光合成により、海藻や植物プランクトンが増え、ウニの餌となるホソメコンブや、海に出たサケやサクラマス幼稚魚の餌となる動物プランクトンが増えていくのです。余別川の河口域周辺では、毎年春にこのようなドラマが展開されているのです。

一方、海で生産された栄養はやがて海の底へ沈んでしまいま。しかしこれらは秋や早春の湧昇作用（風や海流の作用で深い水が表層に持ち上げられる現象）により、ふたたび植物プランクトンなどに利用され、最終的に大型の魚類（さけ・ます類など）が成長する糧（なで）に変わるといわれます。そして、産卵のためにサクラマスやシロザケの親が、余別川を遡上します。

このとき、身体に栄養を蓄えたさけ・ます類は川を通して、上流域の森や林に海の栄養を運ぶ役割を果たしています。これ

が「生物ポンプ」と呼ばれる大切な役割なのです。

ダムがない余別川では、海と川を自由に行き来する生き物たち、魚類や甲殻類（エビやカニの仲間）が、今もなお森・川のつながりをつむいでいるのです。

この他にも海の栄養を森に運ぶ生き物たちがいます。空を飛ぶ鳥類です。ウミウやウミネコなどがそれですが、この点については別の機会に触れることにしましょう。



▲余別川中流の様子

海と森をつなぐ川、生き物たち

ところで、さけ・ます類が海

の栄養を山（森）へ運ぶには、別のグループの生き物たちの助けが必要になります。その生き物とは、森に住む生き物たちのヒグマ、キタキツネ、オオウシ、オジロワシなどです。彼らは水中のサケやマスを陸上に持ち上げ、川辺や森のなかに運び込み食べます。その食べ残しやフンは、さらに小型の生き物たち、森や林の昆虫やバクテリアにより砕かれ分解され、やがて森の栄養に還るといわれます。

余別川の流域では、これらの生き物たちが活発に、でも私たちの目には触れにくいところで、無数のつながりを網の目のようにつむいで、海の栄養を山の栄養に変えているのです。これだけを観ても、余別川流域の生物多様性は維持されていると言えそうです。

余別川は、水の流れる距離が15kmほどでそれほど大きい川とは言えませんが、それでもきらりと光る、貴重な輝きをもった川なのです。


次回は1年余りを余別川の河畔でくらしで見えてきた課題などを取り上げます。

『労働相談ホットライン』をご存じですか？

- ・ 突然、解雇を言い渡されてしまった。
- ・ 会社が倒産したけど、未払賃金はどうなるの？
- ・ 採用のとき提示された労働条件と違って、どうしたらいいの？

このような、労働条件や解雇などの労働問題でお困りの時は、「労働相談ホットライン」にお電話ください。道内どこからでも電話料は無料です。昼間は仕事が忙しくて電話ができないという方でも夜8時まで相談を行っていますので、お気軽にご相談ください。

フリーダイヤル ハイロードコール

 0120-81-6105

月～金曜日(祝日を除く) 12:00～20:00

【お問い合わせ先】

北海道経済部労働局雇用労政課

TEL 011-204-5354

緑の募金

ご協力ありがとうございました

平成24年度の「緑の募金」運動は、6月20日～7月20日まで、小中学校や産業団体など多くの団体のご協力により、24,403円の募金をいただきました。

この募金は、(社)北海道森と緑の会へ寄付し、町内の公共施設等の緑化推進に役立てられます。

皆さんから寄せられたご厚意は、様々な「森や緑づくり」に活用させていただきます。

皆さんのご協力に心よりお礼申し上げます。

【積丹町国土緑化推進委員会】

積丹町長 松井秀紀